



目次
 □論説と研究
 加茂湖邊にて
 杉葉油の採取に就きて
 後の一年有半
 □隨筆
 西都より
 出張して
 □文苑
 和歌紀行
 □通信
 北海道、東京、赤坂よりはがき便り
 □彙報
 校誌摘要

大正八年八月廿五日 第百八十八號 明治四十四年六月十日 第三種郵便物認可

論説と研究

加茂湖の邊にて 宇志生

◎初夏の日は金北山の裏に沈んで、加茂湖の漣がひた／＼と足元によせて来る。萬緑岸をひたして椎崎の松が畫の様に連る。此の自然の畫面の中にうつとりとして其岸に立つ喧騒な砂塵の里から免れて此靜寂な境に立てば少くとも邪念と、多くの欲求と苦痛は何處にか消え去らんとする。一日に一度宛はかゝる境域に立つて大自然に抱擁せられてしんみりと考へて見たい。雜念を去つた、清淨な頭の中に。

◎浮華なる現世の多くの人たよ。外米の腹をべこつかせつゝある腰辨諸君よ。パンと同盟罷工に疲れんとする労働者よ。半日を晝寝に暮して丁髻思想を脱却せざる農民諸君よ。きよと／＼としたる眼光に落付きなき商工業者よ。諸君等は最近一日と雖安穩の境に生活を祝福しつゝあり得るか。將又靜に天を仰いで清寂の境に自己存立の意義と其向上の途とを冥想する時ありや。

◎今や世の人を擧げて神經過敏に陥りつゝある。自我本位、利己専心の觀念が全世界を占有せんとしつゝあるではないか。社會の複雑化、熾烈なる生存競争は駆つて遂に茲に至らしむるの餘儀ないものであらうか官吏は自己の打算からして其職務に及び實業家は利己の算定からして事業の經營に及

ふ山憲事件は其極端であり、設立せられざる會社の株式募集少からざる如きは其好例である

◎此の如く世を駆つて、自己中心、利己本能たらしめば即ち如何。歸趨すべき所は言はずして知るべきである。尊金亡國更らに過激思想の胚胎も亦茲に因せざるを得ない自治を顧みざる専制、共存共益を意識せしめざる積富、遂に露國の現勢を誘致し、土耳古、支那の慘狀を現出せしめる。

恐るべきは不識の間に變移する民心であり思想である。

◎今更らに政府が内務省に、府縣に、救済民風作興民力涵養に當る人員を配置して徹底的の講演位によつて此の大勢の阻止、挽回、善導を期せんとするは餘りに大膽に過ぎはしないかと思はる、けれども然し出來得る限り各般の施設に亘つて此の趣旨を加味して努力するは喫緊事項なるを疑はぬのである。

◎殊に組織的の訓練を加へて常に共通したる利害の上に共存共益の實を擧げしむる事は思想上にも又産業の振興上にも切實緊要であつて金力を茲に注ぐべきであると信ずる。

◎生活を離れたる獎勵收入を伴はざる指導は現代に於て到底相容れらるべき處でない教育即生活生活即事業事業即共同であつて之を貫くに國家的意識を以てしなればならない。

○あらゆる産業上此の組織的施設は何れにも適應し得べきである。産業組合は固より農業に於ける共同耕作組合、其他養蠶組合畜産組合、森林組合、漁業組合、更らに各種の副業組合に至るまで之が運用によつて受くる利得は増大し其感念は著しく向上するを疑はない。

○一人の疎製、一人の不良は組合全体に影響し遂に自己損失を誘致するのである。斯くて漸次徹底的打撃を加ふる結果は克く一郷一黨相連結し、製品は統合し齊一となり益々其發達を助長するのである。かくして一事の結合は萬事に及ぼし、全局が共同的に組織的に圓滿に運用せられる許りでなく各自善意の競争は時の徒消を感じ、不善の傳播を拒止し、延て民風の作興に資する處少からざるに至る。其事例本縣に於ても舉示することが出来るのである。

○終りに活事例の一つを紹介する金澤村新保同志團長川中川十左衛門は四十餘名の秀才を小學校卒業者より抜き之れに竹細工を傳習しつ、其得たる収入即生活費に充て夜學中學程度の教育を施し自治的に一切の干渉を避け、活教育を施して居る。洵に氏は事業は教育即生活である。而して氏の人格は何等求むる處なく一意人材の養成にある既に高等の教育を受けつゝあるもの自活し得るに至れるもの何れも氏を仰父として尊崇する事思半に過ぐるものがある。

事とせし中川氏の如き眞教育家に委嘱して眞の活教育を施し恐るべき風潮を根本から艾除するの深き企圖を望む事切である。

杉葉油の採取に就きて(承前)

田中榮一

原料は成る可く生葉を使用し蒸餾桶に固く詰め込むときは一桶に約二十五貫を容るを得之れに蒸餾桶の底部より水蒸氣を吹き込めば油分は水蒸氣のために誘出せられ氣体となりて喇叭形誘導管より冷却器に入り冷水によりて冷却凝縮して「フロレンス」管内に滴下する故に水面に浮いたる油分を收集す又下層の水分には幾分の油を溶解するを以て罐の底部より細管により放出せしめ水蒸氣發生罐中に戻し以て油の損失を防ぐ

而して杉葉中に含有せらるる油分を残りなく採取すれば原料に對し約〇七%を得らるべしと雖も蒸餾時間徒らに長きを要し且つ夫れが爲め重要な油分を採取し得るに非ざるを以て實際に採取するには蒸餾時間を六七時間に止め原料中に含有せらるる全油量の約三分の二を採取し更に新らしき原料と詰め換へて蒸餾を行ふを有利とす、而して從來の實驗によるに杉生葉百貫目に付約一升二合の粗製油を採取し得べし今之れが經費の概要を示せば左の如し

○杉葉油採取に要する經費

- 一、器物
 - 湯沸釜 一ヶ 三十三圓
 - 但し約一石二斗入
 - 蒸氣誘導竹竿 一本 二十錢
 - 但し節を抜きたるもの
 - 氣体誘導喇叭管 一ヶ 十圓
 - 但し銅製錫張のもの
 - 蛇管冷却器及桶 一ヶ 九圓五十錢
 - 但し蛇管は六圓六十錢桶は徑一尺七寸の高三尺
 - 温水逆流管 一本 一圓五十錢
 - 但し二分の一吋の鉛管十尺を用ゆ
 - 金網 一枚 三圓九十二錢
 - 但し一分目亞鉛張二十錢六尺
 - 蒸餾桶 一ヶ 十二圓
 - 但し高六尺二寸口徑四尺五寸底徑五尺(二百五十貫を詰め得)
 - 蒸氣留桶 一ヶ 二圓
 - 但し高一尺五寸口徑二尺八寸底徑二尺六寸
 - 土管 四本 一圓三十二錢
 - 但し口徑四寸
 - 雜費 十圓
 - 但し据付其他小物類
 - 小計 八十三圓四十四錢
 - 二、設備
 - 築窯水路開修小屋掛等 十圓
 - 小屋材料 三圓
 - 小計 十三圓
 - 三、製造

杉生葉 百貫

但し造林地上の支障を除くものに依り資材價を見込ます

採取運搬 二人 七十錢

但し女人夫二十人を以て千貫を採取運搬する事を得

採油 二人 六十錢

但し子供と女を使ひ子供は杉葉を刻み又は詰換へをなし女は火炊きと薪取をなす

燃料 八十貫 十七錢

但し一棚を一圓二十錢とし一棚の目方は五百六十貫とす

小計 一圓四十七錢

○杉葉百貫目に要する總經費

固定資本償却額 四錢六厘

但し器物類の保存期を平均十五ヶ年とし毎年總金額の一割を修繕費となし之れを資本の償却額に加へ之れを從業日數百五十日間毎日二回蒸餾するものと

して三百回にて賤したるもの

設備費 三錢

但し斫伐箇所の移轉に伴ひて新に設備するものなるを以て一日二回蒸餾するものなるを以て總設備費を三百回にて除したるもの

採油費 一圓四十七錢

但し粗製杉葉油約一升二合を採取するに要するもの

結論

右計算に依るときは粗製杉葉油一升(約四百六十匁)の費用價一圓二十九錢となりて選鑛用油としては廉ならざるも他の植物性油に比し高價ならず之れを要するに本油の採取に利益なきが如きも造林地拵上利する所尠からず即一ヶ年の從業日數を百五十日とし一日二回採取するものとすれば生葉約二百貫を要し一ヶ年約三萬貫此資材約三萬石を要するが故に今一町歩一千石の蓋積を有する林地とすれば三萬石にては三十町歩となり杉枝條の利用と相俟ちて伐材跡地を清掃するに足るべし又之れを造林地拵の功程に就て觀るに

一、杉枝葉を採取せざる針濶混雑林の斫伐跡地

一人當地拵功程	一町步當地拵人夫
一 反	十 人
三畝	十 十 人

一、杉枝葉を充分に採取利用せる斫伐跡地即ち一町步に付二十人の人夫を節約し三十町に對しては六百人を節約し得べし之れを一人一日六十錢とするも三十町步に對しては三百六十圓の經費を軽減し得られ杉葉油採取の利益は直ちに無じとするも造林費に於て利する所頗る大なりと謂ふべし(了)

本篇は秋田大林區署發行「杉葉油の採取」に依る尙大正七年二月十五日發行山林公報第二號「浮游選鑛油として杉葉油試驗成績概要一參照の事(了生)」

後の一年有半(承前) 於白頭山麓 坂本光太郎

口可愛い兒には旅をさせよ 明二十六日合井浦里より發し國境惠山鎮に到着、足の養生勞々營林支廠等に挨拶の爲め二日間滞在し、二十九日は明化洞迄行く豫定で駄馬を備ふたが、馬子の奴め少々モジヨリ(阿呆)で、荷物もよう上手に付付けないで半里か一里行つてはつけ直道にはしばし迷ひ中途で日を暮らし、普天堡といふ一小部落に着いた時は眞暗で何が何やら少しもわからず、宿を探せせ宿とは一軒もなし、足は凍つて来て歩き難くなる空腹を覺え寒さは身に迫る、憲兵に事情を話せば、内地人の小さな雜貨屋があるから其處へ行つて厄介になれと教へて呉れたが此の雜貨屋の主人評判の無情漢にて、此の事情を話し懇願した處が、長火鉢の傍に座つた儘、障子の向ふより「困つたなア御覽の通りチヨンガー生活ですから何もありません。ヨボの家に泊まれる家がある筈ですよ」とんで相手にならぬ。可愛い兒には旅をさせよといふ事もある如く、旅の辛さを泌々と感じながら途方にくれて居

るところへ、少々日本語の解るヨボがあつて私の家に泊りなさい」と案内して呉れ色々親切にして貰つて此の時は實際地獄で佛に逢つた様にうれしかつた。僕は裏心より彼の親切に感謝した。彼れは僕の爲めにはオアシスである。

新義州を發してより十八日間、苦しい旅行を續けて命辛々年も終りの十二月卅日午後二時五溪水作業所へ辿りついた。思へば過去大正六年の一年も慌たしい生活であつた。

生れて初めての病氣もして見た、思出多い北韓の旅行もして見た、官界より實業界へ生活上の境遇にも一大變化があつた。暮れ近くになつてからますます自分の心の全幅は焦燥と感亂とに支配され勝ちである。

一日でもい、から悠つくりと、月給取りといふいやな生活から逃れて、自分の考へた事を考へて見たい、一日でも半日でもよい。

呵、自分の日頃の生活は自分自身の生活でない事が明確に認識されて居る。何んにか莫迦らしくなつて來た。

感すれば世の中はアラうつせみのうたゝ斷腸の思するヨイツショ過ぎし昔はアノ夢の後よ
其處にまた人生のうきしづみ
□仙境の迎年

旭日暈として新山川を照らし瑞雲霧々として新乾坤を被ひ玉化蕩々人心際々萬象總是是れ春陽の光に満ち茲に大正七年午年の春を迎ふ
高麗の春三年迎へしきのふけふ
うすらにわかる鮮人の言の葉
(渡鮮してより三星霜の今日)

新年來！と家人の喜び狂ふ新年も身北の國境に響ゆる白頭山麓の深雪に包まれて仙境に在りては何の樂もなし翠の門松注連繩飾もなき草庵に起臥 朝に東天に出づる日の光を浴び夕に西方に現はる、日の影を眺めて静寂幽邃屠蘇の氣嫌に羽織袴の千鳥足なる賓客の來り訪ふものなく自ら訪ぬる家もあらず唯だ友とすべきは宿を渡る嵐の音と阿呆々々吾れを罵る鳥の姿のみ

供ふべき屠蘇もなく食すべき雜煮もなく只石の如き明太魚と糖辛き石首魚を以て一盞の朝鮮酒に酔をかひ臭き朝鮮蕎麥をす、唯端然として方九尺に過ぎざる温突部屋に正座して身の健全ならんことを祈りぬ
千年を祝して
千里ゆく馬の年こそ立ちにけれ

おもふがま、に我もす、まむ
これが即ち大正七年一月元旦の有様であつた三日間此處に滞在したる後大鎮坪に赴き穢いヨボチビの方六尺にも過ぎざる温土爐部屋を借り此處に根據を固め木材の檢收に従事したのであつた
□伐木造材及運材

各作業別に人夫を募集し各々頭(之れを伐木運材造材の十長と云ふ)を置きて人夫を取締をさせ又乙請負人よりは各作業地に内地人一名を置き作業監督の任に當らしめるのである今此等作業に要する請負契約書を左に記して見よう
□伐木造材及集運材作業請負契約書
朝鮮製紙株式會社設立發起人總代理鐵三郎

伐出する樹種は主としてテウセンマツ(通俗朝鮮五葉、紅松、海松とも云ふ)タウヒテウセンハリモミ(以上の二種をタウヒ類と稱す)テウセンモミ、タウシラベ(此の二種をモミ類と稱す)而してタウヒ類モミ類を總稱して杉松と云ふ)テウセンカラマツの三種類に限られて居る伐木造材の作業は通俗九月頃より着手し十一月に終り運材路を作りて十一月末集材をなして十二月に至り積雪を利用して次々に示すが如き朝鮮語にて「パッキ」と稱するものを用ひ手曳にて一里乃至は二里の遠きより編筏土場迄搬出するもので一日に一回より二回往復し其の一回の運材積は三尺乃至五尺に依りこれが賃銀は木材の大小運材路の長短に依り差異あれども通例一尺に對し三十錢より五十錢を支拂ふものである、朝鮮に於ける運材法は或る一部分の輕鐵運材及手曳本馬運材を除く外凡て「パッキ」に依るものにして天然を相手の作業なるが故に屢々天候に左右され事業遂行上に及ぼす影響に堪へざるを以て此の時勢遅れの幼稚なる手曳運材法を改良して何か當地に適當なる最良の運材法はなきものか當業者は各々頭りに首をひねりて考究中であるけれども未だに進歩したる運材法の案出を見るに至らないのである然れども今少し交通の便が發達しレール及車輪等を安價に運搬し得るに到らば各所に輕便鐵道の敷設を見るに至るであらう

(甲)ハ請負人岩本正一(乙)ト左ノ條項ヲ契約ス
第一條 乙ハ甲ノ指定シタル營林廠所管普天堡事業區明化洞大陣坪林區ニ於テ大正六年十月二十五日ヨリ大正七年三月二十五日迄ニ左記木材ヲ同下記ノ單價ニテ伐採搬出スルモノトス

伐木地(又ハ類名)	材種	胸高(又ハ末口)直徑	長サ	材積又ハ本數	一尺緋ノ請負單價	備考
伐木地	樹材	胸高(又ハ末口)直徑	長サ	材積又ハ本數	一尺緋ノ請負單價	備考
明化洞	タウヒ類	九材及九太	二間、三間、四間	約六、〇〇〇	〇、一四〇	木取ノ都合ニ依リ二間半ヲ造ルヲ妨
全	テウセンマツ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
全	カラマツ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
全	テウセンマツ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
全	カラマツ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
全	テウセンマツ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
全	カラマツ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
大陣坪	タウヒ類	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
全	モ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
全	テウセンマツ	九材及九太	二間、三間、四間	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス
合計	全	全	全	約一、二〇〇	〇、一四〇	九材ニ限リ四間ハ一分五分増トス

運搬區域ハ伐木地ヨリ甲ノ指定シタル明化洞並ニ大陣坪ノ編筏土場迄トス
第二條 乙ハ作業ノ實行ニ付キテハ常ニ甲ノ監督ヲ受クルモノトス
第三條 乙ハ伐木造材ニ關シテハ別紙仕様書ニ依ルノ外甲ノ指定スル事項ヲ遵守スルモノトス
第四條 木材ノ檢八及材積ノ算定ハ總テ總テ朝鮮總督府營林廠ノ現行規定ヲ準用スルモノトス
第五條 乙ハ伐木造材シタル木材ニシテ毀損瑕疵腐朽等ノ爲メ利用ノ價値ナシト甲ノ認メタルモノヲ除ク外總テ之レヲ造材

僕は西都なる名を聞いた丈で、多年求めてゐた何物かに、會つたやうな気がした。日向は天孫降臨皇祚發祥の地であるから、當にこの原と云はず、國一圓が我國の西都なのである。それでは北都は何處であらう、北門の要樞たる札幌か、小樽か。

○學校を出てからもう四年になる、林友にはついで一度も寄稿しなかつた事を、平詫りせねばならぬ。在校中は自分の責を塞ぐ爲、随分下らぬものを書いたが、その後トント廢して誠に申譯がない、同窓諸兄の度々の執筆によつて、自分も何んだかさいなまれるやうな氣のした事も少くはなかつた。この間桑花子中村君が母校訪問記をものせられた、あれを見て、あの一篇に同窓が企てられた、散り散りになつてゐる同窓をして一寸でも回想せしむればよい、反響は僕に於いては、充分な効果を與へた。すぐに書を佛都の同窓へ飛ばした。雨の霽陶しい六月のある日、それが縣廳の同窓の手に落ち、當時から美しい君の筆蹟での返信が矢張り朝から雨の日に着いた。

○在校中によく書いて、卒業後書かぬものは、僕許りではないやうだ、みんながみんなのやうだ。城麓長谷部兄、鐵丸服部兄、洋舟久保田兄など、何れも雜誌部に掌つてゐた人達が、不思議にも揃つて岐阜縣に在勤せられる、最近卒業の大坪君も同縣の管同縣には「林業園」といふ山林會の機關雜誌があるから、何れもあの椽大の筆を揮つて

スヘキモノトス
第六條 毀損瑕疵腐朽等アルモ利用シ得ベキ木材ハ其ノ程度ニヨリ相當材積ヲ割引スルモノトス
第一條ノ要件ニ適合セザル木材ニシテ利用ノ見込アルモノハ本契約數量以外トシ木材造材ノ作業完成ノ上甲ノ相當ト認ムル賃金ヲ支拂フ
第七條 乙ハ第一條ノ各數量以外ニ於テ其ノ百分ノ三以内ヲ補充材トシテ伐木造材スルヲ得
第八條 指定伐木地ニ於ケル作業實行ノ結果第一條ノ要件ヲ滿タスコト能ハザル場合ニ於テ甲ヨリ他ノ伐木地ヲ指定セラレタルトキハ乙ハ之ヲ伐採補充スベキモノトス
第九條 甲ノ都合ニヨリ乙ノ請負ニ係ル作業ノ範圍ヲ増減變更若シクハ作業ヲ停止シ又ハ期間ノ伸縮ヲ爲ストモ之ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ
第十條 賃金ハ一ヶ月二回以内檢收シタル數量ニ對シ其ノ十分ノ八額ヲ支拂フ但シ甲ハ之ヲ第十五條ノ違約金及第十六條ノ賠償金ト相殺シ尙不足アル時ハ之ヲ追徴スルモノトス
第十二條 第七條ノ補充材ニ對スル賃金ハ第一條ノ單價ニ依ル前項ニ依ル補充材ヲ超過セシ數量ニ對スル賃金ハ第一條ノ單價ヨリ三割ヲ割引スルモノトス
第十三條 第八條ノ伐木地ヲ變更シタル時

及ヒ第九條ノ場合ニ於ケル賃金ハ双方協議ノ上之ヲ定ム若シ協議整ハザル時ハ甲ノ相當ト認ムル所ニ依ル
第十四條 乙ハ甲ノ許諾ナクシテ本契約ヨリ生ズル權利義務ヲ他人ニ讓渡スルコトヲ得ズ
第十五條 乙ハ第一條ノ期間内ニ於テ其ノ作業ヲ完成スルコト能ハザル時ハ其ノ不足數量ニ對シテハ違約金トシテ一尺ベニ付金二十錢ヲ納付スベキモノトス但シ其ノ原因ガ不可抗力ニ因ルモノト甲ニ於テ認メタルトキハ此ノ限りニアラズ
第十六條 甲ハ左ノ場合ニ於テハ本契約ヲ解除スルコトヲ得
一 乙ガ甲ノ承認ヲ經ズシテ隨意ニ作業ヲ中止シ又ハ指定伐木地ヲ變更シタル時
二 乙ガ契約履行能力ヲ缺クニ至リタルトキ
三 乙ガ契約ノ解除ヲ請求シタルトキ
四 本契約ノ履行ニ關シ乙ニ不誠實ノ行爲アリト認メタル時
五 乙ノ所在不明トナリタルトキ
六 乙ノ不注意ニ依リ多數ノ毀損木又ハ不合格材ヲ生ゼシメタルトキ
七 乙ガ本契約ノ條項ニ違反シタルトキ
前項ニヨリ契約ヲ解除シタル場合ニ於テ甲ニ損害ヲ與ヘタルトキハ乙ハ甲ノ算定シタル金額ヲ賠償スベキモノトス
第十七條 本契約ノ通用ニ關シ疑義アルトキハ甲ノ解釋スル所ニ依ル本契約書ハ正

本二通ヲ作製シ双方署名捺印ノ上各其一通ヲ保有ス
朝鮮製紙株式會社設立發起人總代
原 鐵 三 郎
岩 本 正 一
(未完)
西都より (一) 粟良 菱 山
○史書にも「南都北嶺」の語が、散見するが、奈良を南都と呼ぶのは、古くからであらう。東京を東都といふのは、恐らく硯友社の頃からであらう。新聞等には、よく伊勢を「神都」と書いてあるのを見受ける。故「高橋曾山兄が佛都便り」といふ題で健筆を揮はれた、長野としては相應はしい名であると思はれた。僕がまだ在校中、鎌倉紀行をもつて「史都巡り」と題し、自ら得たりとしてゐた事があつたが、鎌倉が史都として、聊か貫祿が軽いやうに思はれる。本春四月九州へ下り、宮崎の北方妻町近郊に方一里許りの原があり、一帯に大小二百余の古墳が連亘起伏してゐるのを見受けた、この原は「西都の原」といふ事で、その古墳の中には、天孫の乗り捨てたまひし御舟を埋めたといふ、傳説の御舟塚などもある。

隨筆

西都より (一)

○同窓生の分布から云つて、關西はまだ稀薄である。この九州へ来て居るのは、三回の山下兄と十回の坂田兄と僕と、その外に九州生え抜きの八回の木村兄と十三回の福澤兄と合せて五人である。寥寥晨星の感がある。
○同期四十四名、ちりちりばらばらの有様分類して見ると地方廳十名、會社七名、大林區署六名、帝林局四名、勉學中三名、其他は自家實業のやうである。向上心の乏しい中にも、飯沼君の力行寮に於ける、丸山君の早大文科に於ける、宮澤君の實科志望準備に於ける、何れも修學の爲、氣を吐くに足るものがある。分布の範圍から言つて最北に居るのは天璫の中川帝林に居る。田中、伊藤兩君で、最南はかくいふ僕の積りで居る。最西は嘗て野澤君が、南滿に居たが今では朝鮮の松川君であらう。かうして見ると、次期の諸君には樺太、臺灣、南洋と更に一段の發展を示して居る、何にせよ同窓の分布は心強いものである。
○僕等の同期は、平均年齢が二十二歳で出たから、もう今年は二十五六の男盛りで達し、半分位は美しい細君持ちであらう、僕の知つてゐる限りでは、四五人しか知らぬ。養子した人も改姓のそれによつて知つた、A君B君、殊に北海道に居るK君の如き、琴瑟中々に相和すとか。
僕らの次回の古畑君、今の田澤君なんかこの頃では可愛さかりの赤ちやんの御父さ

謹啓
霖雨漸く霽れて赫炎の候と相成申し候處校長先生初め諸先生益々御多祥の段大慶至極

東京赤坂より
步兵三ノ五 小澤安親

六月三十日

（前略）當地の職員には主任の外に技手として大學本科出身の者二名實科出身者六名、書記四名、雇十名（内中等學校林學を受けたる者小生の外山梨縣立農林校出身一名、其他は實地經驗によるもの）代人二十一名、工夫及林夫五名、巡視十一名、囑托醫一名、總員六十一名、有之候へ共事務繁多の爲人手の不足を致し居る様な次第に候、本日着任三日目に候へ共未だ何れが何やらさつぱりわからず候へ共何れ當所の事業私共の仕事に就ては追て心に這入り次第詳細御報知申上ぐ可く候、當地の茫漠たる原野と鬱蒼たる森林は内地の比にあらす殊に香川縣あたりを見たる私共の眼には全く異國の地にある感有之候、氣候は遙に信州あたりより寒冷にて只今未だ袷羽織を着用致し居り候
（以下略）

通信

北海道より

水上生

なんだ。

○此頃誌上の人氣役者は、坂本君であらう僕らも毎月君の筆を通じて、北鮮の場面を想像させて貰つて居る。君は誌上から観ても確かに實社會の健闘兒である。今後の活動は刮目に値する、茲に謹んで君の健康を祝福する。

○粟良山とはへんな假名である「眞は天下を望む大伴黒主」とでも、芝居もどきに名乗りを上げべきであるが、もうこれ丈の記事によつて、わかつてしまつたと思ふ。匿名といふものは面白いもので、嘗て文壇へ「十月鳥山」といふ人が現れた、それは穿鑿して見たら、有島生馬氏であつたとか、有といふ字と十月とに分け鳩といふ字を鳥と山とに分けたのだらうたさうだ。

○梅雨明けの徒然に、くだらぬ事はかり書き、誌面を塞ぎました、また何か書きませう

出張して 大木生

北海道廳林務課施設業按

(一) 山に入る

心持清々しい緑の世界を迎ふる歡喜に躍つて別室の窓から道廳の池面を眺めて居ると此處にも同じ様に柔かい女神に感謝の面持で周圍の土に喜びの餘波を送つて居る。過ぎ去つた蠢動の日よ！
自分は今青葉から花、蕾、と自然の進轉に逢ふて天蘆國の山でコンパス下げつ、カッコーの音をきく事になつた。

(二) 天幕を張つて

天才の死の様に冷かに落付いた北國の大自然を背景として山から山に入る僕等の出張は土人相手の天幕生活だ。アイヌ三人にシヤム十人の人夫と僕等二人の出張員は切株淋しい山麓にホンの簡單な雨宿を設けて夜分になると必と誰かの歌つた。

消せばと疲れし腦に夏の夜の蠟燭の香の流れるかな
といふ氣分に逢ふ。

(三) 夜話

嚴かにも尊い。昔懐しい神代の生活！
丈なす黒髪を八重に巻いて首の周りへざらりと下げたアイヌと僕等計十餘人の男世帯は勞れ果て、カッコーの音をきく頃になると百奴蠟燭の下で都懐しい艶話が持出される。斷の最後「では炊夫に二人ばかり女を雇ふとしようかな」と言へば一同さも満足氣に手を拍つて賛成を叫ぶ。

(四) ビリカ

寢覺の身に又無く心持良いのは北國は朝夕の冷氣だ。草鞋軽く天幕を出づると長い區劃線道路だ。
「あれビリカが……。」とアイヌが指さす方を見れば其處には齡芳ばしい娘さんが白手拭に海老茶のエプロンを掛けて土人と共に居る。「ヤア居るね……。」と路々しばらく語らうと此れが基點だ、境界標何號基點何間だ。オーライ。斯うして今日は四千間熊笹

の中を測り續けて大分つかれた。

ぐつさり木株に腰を置く間目に入る蝶のつかねげなる
あゝ雨でも降つて呉れ、ばい、十日も降れば好い。

(五) 雨の日

望通り今日は雨だ床の中で「ね、五君雨だ」「眺向だね」と云うて又床へ入つたら晝頃からりと好天氣になつたので人夫等に「久しぶりだから何か山の美味を食ひたいな」といふと其晩は珍しくも山椒魚が膳に盛られた。殊に功多かつたアイヌの一人は譽めはやす皆の中で大聲からりと笑つて居たつ

(六) 再びコンパス下けて

翌日の雨で世はずつかり淨化された「無涯に晴れたつた北國の蒼穹と神秘に萌ゆる此の地上の青よ」と自分は唱つた。

心持よい北國の朝よ

前日の様に二點三點……とコンパス下げて進むと澤蔭は未だ雪傳ひだ。アイヌに「旦那はん滑るべーよ」と言はれた時もうどうしたはすみみ踏み外して谷底に落ちた。「あ、旦那はんが落ちた」と手となく足となく抱き上げる。大したこともない滑落に却つて有難迷惑だ。然し嬉しかつた。

通信

北海道より

水上生

に御座候降て小生頑健軍務に在候間乍他事御休心被下度候
日畧早うして曩に第一期檢閲終了を御報知仕り候てより三閱月今再び第二期檢閲を終了せしを御報導仕る可き時と相成申候
此の間密集教練に戰術教練に諸學課行軍等日も尙足らざる程に候ひき

千葉縣下習志野に曠野あり地平夷にして草長く演武の好適地に候東京を距る七里海風見舞ひ雄松鳴るの地遠く筑波の山を望み得申し候、我近歩三聯隊は去る六月二十四日強行軍を以て出向仕り候檢閲第一日は夜間演習第二日は戰術教練第三日は檢閲行軍に候航空機其他武器の戦場に使用せらる、様に相成候てより將來の戦術は主として夜間に行はるべき由にて其の教練も仲々盛に萬事靜肅に秩序と聯繫とを保つを緊要と致し候斥候歩哨の動作も至難に候

第二日の戰術教練にては飛行機射撃「横撃の構へ」并に「砲彈下の行進」等未だ歩兵横典に規定せられざる新課目の檢閲も有之候「横撃の構へ」にては所要の距離若しくは間隔を取り仰向になり射撃動作をなすものにて此は歩兵學校にて久しく研究せられし結果に候由砲彈下の行進にては曠野を過る部隊の砲彈に對する被害を一小局部に制限するを目的と致し候各小隊共分隊毎に距離間隔を増大するものにて「並列分隊」一列縱隊の三線間隔四十歩距離百五十歩何分隊基準開ク」てふ妙に長き號令にて候

はがき使ひ

朝鮮金剛山より

本多生

東洋の景勝地金剛山の國有林調査にて出張中に御座候、本地は景勝の地たるのみならず朝鮮古代の研究資料豊富にして史家畫家

の避暑を兼ね来るもの頗る多く尙近時諸名士の往來繁く殊に夏季は随分賑かに御座候

炎熱熾くが如き三伏の候と相成候處校友諸兄に在らせられ候ては、益御清榮の段奉賀候降て小生儀令般教育のため来る廿五日より八月末日迄越後國北魚沼郡小千谷

活動期 桑花子

昨日は恰度土用の入りでした、日は一日と暑さが増すばかりです私共の様な外業而も測量が殆んど專業の者には尚一層に感じられます、學校に在られる諸君も亦夏季實習に大分汗をこられることせう又卒業された人々も多くはこの炎熱の中に御奮闘の事と思はれます

書いて校友會員諸兄の御教示を仰がうとは思ひましたが多忙に追はれて駄目になつて了ひました、また何れ拙いながらも、何か書くつもりです今日は只會員諸兄の御健在のみを祈ります 一九一九、七、二二

文苑

和歌

駒ヶ嶽十三首(その二) 宿直生

ひながしの高山脈にかけろひの 立てて川瀬の音かすかなり かげろひの高山脈に立つ見えて 行明の月飛驒に落つるも 駒ヶ峯めかねのさせばごころも 山腹の路馬車の行けるも さらさら朝日輝き駒ヶ峯

コバルト色に變りたる不な 駒ヶ嶽の尾ぬれにつつく山脈は ならりき青く日に輝けり

かんかん夏夏の太陽地を照らし 駒ヶ山峽明かに見ゆ

もくもくと駒ヶ峰ぬち雲起り ゆゆしく見ゆる駒ヶ峯山

雜菊

ワニスワニス作 鈴木 静夫譯 曙の光りに感動した時 雛菊が華やかに生ずるのを見る そよで無性に嬉しくなつて

しの心は丁度お前の様だつた 黄昏れて露をもちたらし 雛菊が眠りに落る頃 心細く悲歎にくれたわしの心は お前のお陰で大變慰められた。

關西旅行 (承前)

五月十七日 晴

上市發 高野山迄、俵屋をたつて吉野川のほとりを歩いた時は丁度木曾路を辿る様な気がした、吉野驛から乗車し、吉野口驛で和歌山線に乗り替へて青い、麥田の中をすべつた、右手に雄然と聳へて居る金剛山を見ては楠公の忠蹟を思ひ出した、やがて高野口驛で下車した、驛前の自動車人力車の數多いのを見るにつけ參詣者の多い事を推察した、脚を高野小林區署に運んだ、署長より署内の事業の大略を受給はり、終つて署員の案内で森林軌道を傳つて、神谷宿の制動斜面を視察した、この軌道延長十四哩四分九度山貯木場から高野山國有林の第二十六林班迄達して居る、神谷は九度山を距る約百二十哩の所に位し、斜面勾配平均二、〇七分、延長百六十二間、一行はこの斜面を無理にはひ上り神谷宿の參詣道へ出た時は太陽が西の山の端に沈んだ頃であつた

る野店がある、有名な高野材はこの地方に産するのである、當木材は關西地方屈指の良材で、木質極めて緻密にして通直に、その色澤の卓絶した點等其の特色である、且交通便利の爲伐採後一日にして大阪市場へ出す事が出来るといふ事である、登る事約小一里にして海拔三千尺海内唯一の大靈場の高野山へついた、身は仙境に入つた様な気がした、皎々たる電氣は寺又た寺の間に輝いて居る、やがて時明院小坂坊に投宿した、生れて初めて寺に宿り、生れて初めて精進した、いつも宿屋で騒いだ一行も今晩に限り打つて變つて静かで皆澄まして居た。

五月十八日 晴

高野山發 大阪迄 高野山は高野口驛より四里、莊麗な堂塔は山に凭り谷を埋めて本邦第一の靈刹と稱せられ、寺域周圍十三里、僧坊百二十餘もあるといふ事である。午前七時用意萬端整へ大急ぎで奥の院へ參詣した、小坂坊から奥の院迄十八町、參道の兩側には幾百年の星霜を経る杉の巨木が空高く聳へて居る、其の下には古の各大名の墓所がある、石造の五輪の塔が無數に立つて居る、十才位の小僧が參詣人に對し、いち／＼之は何々大名の墓と暗誦的に説明した、そのアクセントは實に奇抜である、奥の院へ參詣しては長者の万燈貧者の一燈も見る事が出来た、もとの道を過ぎ金剛峯寺へ參じた、堂寺は高野山中最大の寺で、

附近に高野中學大學がある、夜庭球や擊劍の試合を一行に申込んで来たが疲勞の故であつてこととはつた、見るべき所は無數であるが時間に賣められて、不承々に山を下つた、少しをくれた者は推出から人力車にのつた、道行く人は、これを見て「あれは東京の學習院の生徒ださうな」等噂して居たのも一寸愉快であつた、二時二十分高野口發橋本驛で高野電車にのりかへ大阪へついたのは午後五時 (續)

縣内の旅 (第一日) 伊藤生

五月廿六日親しき母校に三日間の別をつけ、午前五時發の汽車に一同乗込んだ、旋て發車の合圖の汽笛は氣立ましく鳴る、煙を吐く音凄しく車輪は早や廻轉を初めた車窓に木曾の曙景を賞翫しつ、約二十分で宮之越停車場に下車した、それから愈々峠に掛る、我等五十餘名峽深爪先上りに魚貫して進むと息は喘ぎ渴き覺ゆる事一通りでない、暫時草叢に腰を下して休憩、目前に横たはれる權兵衛峠を見ては突破の困難を想像せずには居られない、昇り口より小一里も来た全身淋漓たる汗、時々涼風に吹き拂はれて苦しさも休めた、然し空腹は益々空腹を覺えて辨當が氣に掛る計りであつた。やうやく頂上に達し快哉を叫んだのはその後二時間半の後だ、眺望絶佳の此の頂上で先刻より氣掛りの辨當を手早く解いた。一同晝食を終つた時は確か午前十時だつた。

それから霞に包まれて朦々たる伊那町を眺めながら峠をひた下りに下り林の間を通つて伊那町に着いた。農學校を視察して午後三時半辰野行の電車に乗り、辰野へ着いたのが五時半頃で日は既に南山に傾いて居た、此處から汽車に乗つて車窓から林の如く立てる無數の煙突を數へながら岡谷も通過して上諏訪は甘精軒に投宿した。

第二日 小縣生

昨日の疲れで脚が棒の様になつて痛くて歩かない。宿を出たのが午前五時。小石を敷きつめた長い道は初めてであるのと豆の出来た脚であるのとで随分長く感じた。途中諏訪神社へ參けいし暫く脚を休めて復脚を引出した。湖の邊で富士山が見えるさうだが今日は雲の爲に見えない。岡谷へ着いた頃はもう店の棚を見れば涎が垂れる程空腹を覺えた。平野蠶絲學校を參觀し片倉製絲工場を觀た、色々説明は聞いたが其僕等は急いで居てあまり氣を入れて聞かなかつた。巡覽を終つて鮮の饗應を受けたが、一生懸命で掻込んで早速逃げる様にして工場を出た、十一時四十分岡谷驛の列車は僕等に乗せて松木に着いた。直に兵營へ向つた、兵營では中隊教練の有様を観たり又機關銃の操法その他營内殆んど全部の建物内部を觀た。更に營内生活など細かく親切に説明して呉れたが、疲れきつた僕等には飛び立つ程嬉しくもなかつた、一日は松本の千歳館に今日の疲れを恢復す

第三日 宅見生

深い深い夢路に進入した。午前八時出發の豫定であつたが十時まで自由行動を探ることになつた。先づ記念館を見に行つた、内にはひつて見ると澤山の参考品が陳列されてあつた、其の主なるものを挙げれば階下に福島大將の軍服、露日獨戰役記念品が陳列されてあつた、此の中には志士沖禎介、横川省三、田村一三の遺物があつた、之を見て彼等の誠忠を想起し花と散りにし其の潔き最後を稱へずには居られなかつた、尙日露兵士の用品戰役書類があつた中に佐久間大尉の遺書もあつた入室に至れば昆蟲類、鳥類、獸類進化に關する標本が所せまきまで陳列されてあつた、話に聞きたる駝鳥の卵他のるれに比して大なるには驚いた、此處にありしものより大なるものありと言ふ階上に至れば殆んど歴史地理に關する参考品で埋められて居た、何れを見ても裨益する所多く殊に朝鮮支那の風俗標本には興をわかつた。次に天守閣を見に行つた、さして大きなものではなかつた昔は是で充分に敵を防ぐことが出来たものだ、然し今は大砲の九一つ命中すれば木葉微塵となつてしまふ昔と今の相違の甚だしいに今更驚かずに居れなかつた、時間が切迫して來たので此處で宿に引返した、十一時に同地を發足して牛伏寺に向つた十重二十重に圍める四方の連山を見れば流石は山國程あつて何れも木が生ひ立つて居る。

中には所々赤土の見ゆる山もあつた此の赤土の山を見て西澤光生が何時もよく言はれる「信州も段々木材が缺乏して來た」と云ふ言を思ひ出した。河原の様な所に松が疎に生えて居た所があつた洪水の時には此處まで水が出で來るのだらう、日はじりりと照りつけて汗は瀧の如くに流れ出した、會ふ人毎に道を聞きつ、段々近づくとに元氣を得て漸く牛伏寺の麓まで着いた、此の邊一帶に河幅の廣いに拘はらず水は僅かしか流れて居ない、砂防工事の必要も大いにあると思つた。此處から新式砂防工事まで二十町程あると言ふ之を見る餘裕なく遺憾乍ら村井に引返した唯有志のみ寺まで發つた此爲め三時三十六分の瀧車に僅か四五分の遅れで乗ることが出来なかつた。最後の五分間とはよく言つた者だ僅か五分の違ひで此處に二時間無爲に過ぎなくてはならなかつた。五時二十五分村井發五時四十二分塩尻に下車し直ちに農學校を參觀した、圃場の整理せることは昔等に好感をあたへた、時間もないので大急ぎでカーバート製造所を觀に行つた惜しいかなカーバート製造所は休止中で唯機械のみ見た而して七時五十五分福島行の瀧車に身を投じ歸途に着いた朝よりの徒歩にて身体綿の如くに疲れ氣も心も一時に緩みしこと、正体もなく車内を假の宿と定めて眼を閉ぢた、俄に靜かにならずはり目覺れば「未曾福島」の驛夫の呼び聲が

聞けた夢現の中に既に歸つたのだ、何と瀧車は便利なものだと思ひしたと同時にスチンプンソンを崇敬せずには居られなかつた、驛の構内には二年三年が迎に來て居られた。ガヤムと話し乍ら空腹を抱へ重き路を引さずつて歸校した。

彙報

校誌摘要

- 參觀 盛岡高等農林學校林科生廿名は武藤益藏教授に引率せられ修學旅行の途次七月廿一日本校を訪問し標本室其他を視察す
 - 登山延期 夏季實習後の駒ヶ嶽御嶽等の登攀は脚氣症にて缺席せる者多きを以て夏季休業後に延期することとなりたり
 - 出張 七月二十五日より二日間縣廳に開催の縣下中等程度諸學校校長會議に列席のため七宮校長登應せらる
 - 終業式 七月二十八日朝より校内の大掃除を執行し九時終了九時半より講堂に於て開式、校長より一場の訓辭ありて閉式せり生徒は大抵この日歸郷の途に上り
 - 出張 中村、塚越兩教諭は七月二十七日より八月九日まで二週間輕井澤夏季大學英語講習修得のため出張を命ぜらる
 - 出張 西澤教諭は八月十一日より二週間大日本山林會主催第一回林業講習に出張を命ぜられ八月十一日より二十日まで十日間は東京農科大學に於て受業二十二日より二十四日まで千葉縣清澄山演習林に於て視察見學を遂げられて歸校の豫定
- 會員異動は餘白なきに付次號に記載す

大正八年八月廿三日印刷
長野縣松本市小瀬町八十五番地
長野縣松本市小瀬町八十五番地
長野縣松本市小瀬町八十五番地